

國學院大學學術情報リポジトリ

〔書評〕 高村聰史著 『〈軍港都市〉横須賀-軍隊と共生する街』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土田, 宏成, Tsuchida, Hiroshige メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000720

〔書評〕

高村聰史著

『(軍港都市)横須賀 軍隊と共生する街』

土田宏成

本書の概要

本書は一七七年間にわたって『新横須賀市史』の編纂に携わってきた著者による〈軍港都市〉としての横須賀の通史である。本書の目次は以下のとおりである。

「横須賀ストーリー」ープロローグ

軍港横須賀の誕生 寒村から軍港へ

対外戦争と軍港の人びと 日清戦争・日露戦争から関東大

震災まで

横須賀軍港の完成と太平洋戦争開戦

敗戦と軍港の戦後 戦後横須賀の原点

海軍の遺したもののーエピローグ

本書で描かれるのは、「近代海軍建設、そして戦争、敗戦へと至る過程で、一寒村から一大軍港都市へと成長した横須賀の軍港市民と海陸軍がいかに共生してきたのか、地域のなかに存在する軍隊とはいかなる存在であったのか、また、海軍や陸軍の「恩恵」を被りつつも、内なる矛盾と葛藤しながら軍港都市として発展を続け、敗戦で何もかも失っていく姿」(「横須賀ストーリー」)である。以下、章立てにしたがって内容を簡単に紹介することから始めよう。

「軍港横須賀の誕生」では、横須賀に軍港が設置され、その建設が進んでいく過程が描かれる。ペリー艦隊の浦賀への来航をきっかけに海軍整備に動き出した江戸幕府はフランスの援助により造船所(製鉄所)をつくることを決め、その建設地に横須賀を選んだ。明治維新後、造船所は新政府に引き渡され、建設が続けられた。明治一七(一八八四)年には横須賀に鎮守府が置かれ、軍港化も進む。都市形成もなされていった。

「対外戦争と軍港の人びと」では、日清戦争・日露戦争への横須賀市民の対応、日露戦後の海軍軍拡・第一次世界大戦後の国際的な海軍軍縮の影響、関東大震災による被害と震災下の軍隊の救援活動などが述べられている。震災時における貢献によ

り、海軍の横須賀市に対する影響力が高まったとされる。

「横須賀軍港の完成と太平洋戦争開戦」では、関東大震災の画期性が指摘される。街づくりにおいて震災が画期となることは、南関東地域に共通する現象であるが、横須賀では、復興過程で市が都市計画を実施しただけでなく、海軍が民有地と海軍用地の大規模な交換による基地の整理を行ったことで、横須賀基地のスタイルが完成することになった。その後、満洲事変をきっかけに横須賀は活況を取り戻し、戦時体制強化の過程で周辺町村を合併、太平洋戦争開戦後の昭和一八（一九四三）年には四町二村を合併し「大横須賀」を完成させる。けれども、戦局の悪化とともに横須賀も空襲を受け、敗戦を迎える。

「敗戦と軍港の戦後」では、敗戦と連合国軍（アメリカ軍）の占領によって、日本海軍の軍港としての歴史を終えた横須賀が、新たに米軍の軍港となっていく様が描かれる。

そして、エピソードの「海軍の遺したもの」では、本書全体の要約の後、「海軍」を「歴史資源」として活用し、地域を活性化しようとしている現在の横須賀の姿が述べられる。

本書から読み取れる横須賀の特徴

本書には、著者が関わってきた自治体史編纂の成果はもちろん、「軍隊と地域」研究、「軍港都市史研究」の成果が凝縮されている。本書は〈軍港都市〉横須賀の通史でもあり、小百科事典ともいえる内容を持つ。

軍港のある都市は複数あり、軍隊の存在する都市はさらに多い。それらの都市には共通点がみられるいっぽうで、それぞれの土地ならではの特徴が存在する。地域の歴史を描く際にこうした二つの視点は欠かせない。その両方に通じた単独の著者による通史として、横須賀の特徴が明確に捉えられていることが、本書の強みである。本書から読み取れる横須賀の特徴は以下のとおりである。

まず他の軍港都市と比べた際の地形の狭隘さである。横須賀では幕末の横須賀製鉄所の設置を起源として軍港が発達し、日本で最初の軍港都市が形成された。それに対し、後発の呉・佐世保・舞鶴などは、横須賀の経験も踏まえ、計画的に近代的な軍港をつくることをめざして選定された。当初は近代的な軍港をつくることを想定していなかった横須賀は、後発の軍港都市

と比べて地形的に狭隘であり、軍用地の確保がより困難となった。そのことが軍と地域社会の間のあつれきを生んだ。

二つ目は、横須賀が帝都である東京の近郊に位置していることである。これが他の軍港都市にはない特別な地位を横須賀に与えた。海軍の教育機関が多く設置された。また、横須賀は海軍根拠地としてだけでなく帝都防衛の拠点としての役割も併せ持つことになった。帝都東京と横須賀軍港を防衛するために、横須賀を含む東京湾口に陸軍により砲台群が築造され、要塞砲兵も置かれた。日清戦争を機に東京湾要塞司令部も設置されている。

三つ目は、二つ目の特徴と関わるが、横須賀が〈軍港都市〉であるとともに、要塞砲兵の置かれた〈陸軍の街〉である豊島エリア、海軍航空隊の置かれた「空都」である田浦エリアをも含む、複合的な〈軍都・軍港都市〉となったことである。ひとつの地域に海・陸・空の軍隊とその施設が集積している都市は、日本では例がない。

四つ目は、敗戦後の連合国軍（アメリカ軍）による占領に特色が見られたことだ。昭和二一（一九四六）年四月、横須賀の米海軍の第四代司令官として着任し、二五年六月まで四年にわたってその地位にあったウェーバー・デッカー大佐（のち少将）

の影響の大きさである。デッカーは、食糧不足に苦しむ市民に食糧を提供したり、民主的な政策を押し進めたりするなどして、横須賀市民の心をとらえ、さらに横須賀基地司令官という立場を越えて、市政に介入した。そのことを著者は「ミニ・マッカーサー」とも言うべきデッカーの「王国」が存在していた」と表現する。デッカーの提言もあり、日本の独立回復後も横須賀基地は米海軍基地として使用され続けることになった。

以上の点は、横須賀という都市の特徴を考える際だけでなく、他の軍事都市を論じる際にも大いに参考となる。

本書のすそ野の広がり

昭和一七（一九四二）年四月の日本本土初空襲であるドーリットル空襲をはじめとして、横須賀も空襲を受けた。けれども、近郊の東京や横浜・川崎、あるいは他の軍港都市の呉や佐世保と比較しても、その被害は相対的に小さかった。横須賀がアメリカ陸軍航空隊による戦略爆撃の重点対象から外れ、超大型爆撃機 B 29 を用いた大規模空襲を受けなかったからである。横須賀のような重要軍事拠点がなぜ重点対象から外されたのだろうか。本書にはその理由までは書かれていない。

本書は広い読者を想定した叢書の一冊としての性格上、分量や記述においてどうしても限界がある。本書を読んで疑問に感じたり、さらに深く知りたいと思ったりしたことがあれば、記述のもとになった研究に当たろう。大規模な空襲を受けなかった理由について、著者は横須賀の空襲の実態を明らかにすることを目的とした「米英海軍による空襲と横須賀」(『市史研究横須賀』第一三号、二〇一四年)の中で言及している。それは、アメリカの陸軍航空隊が横須賀への攻撃作戦の大部分を海軍航空隊に任せたと、米海軍は都市への爆撃よりも艦船の破壊に関心を持っていたこと、米陸軍航空隊も東京に比べてはるかに重要度が低く、軍港として防御体制が固められ味方に犠牲が想定される横須賀への攻撃に消極的だったことなどである。

本書を海に浮かぶ島に例えるならば、海上に出ている部分以外に、海面下にはそれを支える広い研究のすそ野が広がっていると表現できよう。日本を代表する軍港都市の通史が刊行されたことにより、軍港都市史研究は、さらなる段階に進み、「地域と軍隊」研究の蓄積も厚みを増した。戦争と平和、都市化、在日米軍、歴史の活用など、扱われているテーマは、日本や世界、地域の過去・現在・未来を考えるうえでも有用である。横須賀の街とそこに住む人々への愛にあふれた本書が広く読まれ

ることを希望してやまない。

(四六判、三三九頁、吉川弘文館、二〇二二年八月発行、定価二一〇〇円＋税)